

# 遼寧省北票市金嶺寺遺跡 および大板営子遺跡出土 遺物の調査

## 1 はじめに

**共同研究** 遼寧省文物考古研究所との国際共同研究は現在、2011年に開始した第4期「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」を継続中である。本報告はその成果の一部である。2013年度は、金嶺寺遺跡出土瓦と大板営子遺跡出土金属製品について調査を実施した。

金嶺寺および大板営子遺跡は、北票市大板鎮に所在し、大凌河中流域の丘陵地帯に立地する。時期は3～4世紀頃とされ、慕容鮮卑・三燕に関連すると考えられている<sup>1・2)</sup>。いずれも遼寧省文物考古研究所によって発掘調査され、金嶺寺遺跡では大規模な建築遺構が、大板営子遺跡では墓地が発見され、瓦や金属製品などが出土した。

(小池伸彦)

## 2 金嶺寺遺跡出土瓦の調査

**調査の経過** これまでに2011年11月、2012年3月、2013年11月の3回に分けて調査をおこなった。作業は資料の観察・調書の作成・写真撮影を中心におこない、一部の資料については拓本の作成にも着手している。現在、軒丸瓦32点、軒平瓦1点、丸瓦8点、平瓦2点の調書の作成と写真撮影が完了し、14点(うち軒丸瓦11点、丸瓦及び軒丸瓦筒部3点)の拓本を作成した。

ここでは、特に軒丸瓦を中心として、これまでに得られた出土瓦の特徴を述べる。なお、観察所見については、調査に参加した清野孝之・森先一貴・川畑純による知見を川畑が取りまとめたものである。

**軒丸瓦の概要** 軒丸瓦は瓦当部直径16.3～17.9cm。中心に直径3.7～5.4cmの半球形もしくは円錐形の中房を持ち、輻線で内区を6分割する。ただし1点のみ、3条一組の輻線で内区を4分割するものがある。輻線の間に蓮蕾文が配され、蓮蕾文の周囲には輻線から派生する網目状の突線が延びる。外縁は素文の直立縁で、高さは1.1～1.9cm程度である。外縁の外周には押圧波状文が施されたものがある。なお、平瓦の広端凸面側の縁部にも指頭押圧波状文が施されたものが確認できる。

瓦当面には木目痕とみられる細線が浮き出たものがあ



図1-11 軒丸瓦写真(左上:標本14、左下・右:標本1)

り、木製範であったことがわかる。一部には範傷も認められ、これを基に同範品を同定する作業を進めている。現状で11種以上の瓦当範を確認した。

筒部が完存するものでは全長は52.8～55.7cm。いずれも玉縁式で、玉縁長は5.5～6.1cm。製作技法を観察可能なものでは、幅3～5cmほどの粘土紐を模骨に巻き上げあるいは積み上げて丸瓦円筒を成形し、玉縁部は肩部を貼り足すことで形成されたとみられる。筒部側面は広端側から狭端側に向かってヘラ切りされている。丸瓦では側面凸面側に分割破面がみられるが、軒丸瓦筒部ではみられない。凹面には玉縁部まで布目が残り、凸面は玉縁部を含めて回転ナデによって丁寧に整えられる。

瓦当裏面下半には外周に沿って突帯状の高まりがあり、瓦当裏面は中心が窪んでいる。突帯状の高まりの上面にはヘラ切りの痕跡がみられ、丸瓦円筒と瓦当部粘土を接合した後、丸瓦円筒を半切して不要部を切り離す一本造りによって成形されたものと考えられる。

**今後の課題** 軒丸瓦については、詳細な製作技法があまり明らかになりつつある。一方で通常の丸瓦では、厚手で全長の短いものがあり、軒丸瓦の筒部とは異なる特徴をもつ個体があることが判明している。今後は丸瓦・平瓦全体の状況の中で軒丸瓦の製作技法を位置づける必要がある。また、軒丸瓦・軒平瓦にみられる指頭押圧波状文についても他遺跡出土例と比較検討する必要がある。今

後の継続的な調査によってあきらかにしていきたい。

(川畑 純・清野孝之・森先一貴)

### 3 大板営子墓地出土品の調査

23基の墓が発掘調査され、木棺墓と石槨墓が混在することがあきらかとなったほか、土器や金属製品など多様な遺物が出土した。報告者はその年代について、北票市喇嘛洞墓地よりも古いとし、3世紀中晩期とする<sup>2)</sup>。ここでは今回調査した鉄矛について紹介する。

M8・M10・M14号墓から1点ずつ、計3点の鉄矛が出土している(図I-12)。計測値は表I-4の通りである。いずれも鍛造品で、袋端部に切り込みをもたない、いわゆる直基式である。身部と袋部の境に関をもち、身部断面は扁平なレンズ形を呈する。袋端部付近には木柄を固定するための1対の目釘孔が穿孔されており、1と3の袋部内面には鉄製の目釘や柄の一部とみられる木質が遺存している。

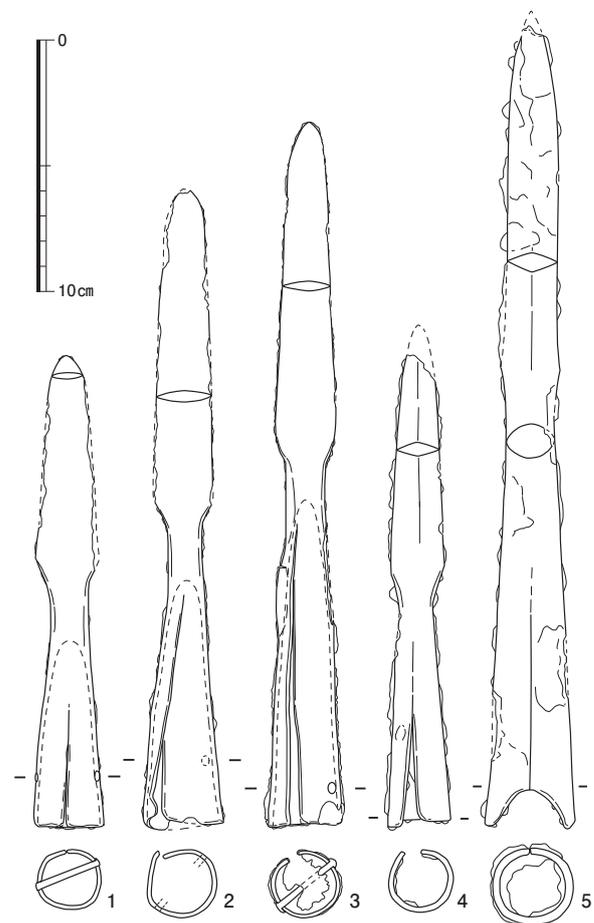
三燕の鉄矛については喇嘛洞墓地からまとまった資料が出土しており、それらの中には大板営子墓地出土品と同じような直基式(4、喇嘛洞IM204)に加えて、山形抉り式(5、喇嘛洞IM13)が存在する<sup>3)</sup>。中国においては戦国時代にまず前者が出現し、後者は漢代以降に出現することがあきらかとなっている。どちらの型式も漢代にはすでに出現しているため、三燕の鉄矛にみられる袋端部の違いが新古を反映しているかどうかについては、共伴遺物の検討をふまえた上で慎重に判断する必要があるが、両墓地における鉄矛組成の違いは、両墓地間の併行関係を考える1つの材料となる。なおこれらの鉄矛の所有者については、鉄矛副葬墓出土人骨がいずれも成年男性であること、埋葬施設の規模や構造などからみて、大板営子墓地造営集団の中でも有力者とみてよいだろう。

(諫早直人)

### 4 まとめ

今回は、おもに軒丸瓦と鉄矛の概要を報告した。中間報告ではあるが、当該地域・時期の瓦製作技法について新知見が得られ、副葬品中の鉄矛組成やその所有者像についてあきらかとなった。また、課題も浮き彫りとなり、今後の調査に期待のもてる成果が得られたといえよう。

(小池)



図I-12 大板営子墓地(1~3)と喇嘛洞墓地(4・5)の鉄矛

表I-4 大板営子墓地出土鉄矛の計測値

番号	遺構名	埋葬施設	全長	身部最大幅	袋部最大径
1	M14	木棺墓	18.7	2.4	2.8
2	M8	石槨木棺墓	25.4	2.4	3.2
3	M10	木棺墓	28.1	2.4	2.9

\*番号は図I-12と対応。単位はcm。

#### 註

- 1) 辛岩ほか「遼寧北票金嶺寺魏晋建築遺址発掘報告」『遼寧考古文集2』科学出版社、2010。
- 2) 万欣「遼寧北票市大板営子墓地的勘探与発掘」『遼寧考古文集2』科学出版社、2010。
- 3) 豊島直博「三燕の鉄製武器」『北方騎馬民族のかがやき 三燕文化の考古新発見』飛鳥資料館、2009。